

BANTOU 番頭の時代

風土改革と帝王学伝承も使命

1面から続く

日本型の「種彦役」とも言うべき番頭は、徳川3代将軍家光の時代にできたと言われる。人臣の主人を助け、雑務の実務にだけなく専断の権限から、場合によっては主人を監視させ、縁取りの若目番を兼ねるなど、大きな権力を持つ存在だった。

明治維新から戦後の高度経済成長の間も日本企業は番頭とともにもあった。本田技研工業の創業者・本田宗一郎を財界で支えた藤沢武夫や、松下電器産業(現パナソニック)の創業者・松下幸之助を縁から海外事業まで幅広くバックアップした高橋大造など、日本企業で一大番頭と呼ばれた人たちは少なくない。

高橋は松下幸之助が死去する2年前の昭和42年に別荘で倒れ、長い闘病生活を送った。だが平成元年、幸之助が死去したときは、不自由な体を押し立てて立ち上がり、経営する「藤沢の神様」を思ったという。

翻って現在、経営者が他の企業トップに転じる「プロ経営者」が、経営界では目を集めている。日本コカ・コーラの社長、会長を兼ね、四半世紀にわたって魚沼産の日本マクドナルドホールディングス会長からベネッセホールディングス会長兼社長となった藤田洋一。ロンドン会長からサントリーホールディングス(HLD)の社長に

サントリーの社長の系譜



就任した新淵昭史も、その一人と評される。

プロ経営者は収益や業績の拡大、風土改革などに手腕を揮うことが最大の使命だ。新淵も同様だが、彼の使命はそれだけではない。

「大きなことはすべて自分で決めてしまった。そのおかげで、四郎に後継者を育てきれなかった」

社内外では創業者出身で、サントリー食品インターナショナル社長の鳥井清忠が後継者とみられてきた。その鳥井を名継ぎ者に育てることも、新淵に委ねられたもの(1)の使命だ。

株式を公開していないサントリーのサントリーホールは、約9割の株を創業者一族の資産管理

会社「売不勘定」が噂され、オーナーに譲り渡す。藤田は「会長に」とり、新淵をサポートしては、無名の番頭を相える。それはまさに、プロの番頭BANTOUのミッションに情なない。

「サントリー社長の跡を受けたいと思いません。今年春、新淵は二階堂専任会長、小島昭彦や、取締役の佐々木新夫を助けて、自らの進退と後任について相談した。経歴者としての最初のレールを敷いてくれた佐々木や小島らに、まず相談した上で、佐々木さんに初めて「アエス」を伝えた」という。

新淵の将来を聞いて、二階堂がついてまわる。各経歴者となるには、創業者の風光に頼らなければならない。周囲を動かす力を持つこと、それが新淵が伝えたいことだ。佐々木は、鳥井がオーナー一帯から西陣出身のロンドン幹部を、1人ずつ呼んで新淵を支援するよければベストだ。(敬称略)